

ノルウェイの森

—— 映画文学人生論

原作：村上春樹（1987年） 講談社
監督・脚本：トラン・アン・ユン（2010年）
出演：ワタナベ 直子 菊池凜子 音楽：ジョニー・グリーンウッド
緑 キズキ 水原希子 主題曲・主題歌：ビートルズ
高原健吾 レイコ 霧島れいか

この曲を聴くと深い森のなかで迷っている
ような気がするの

村上春樹『ノルウェイの森』が発売後たちまちベストセラーとして話題になったのは昭和が平成に変わる頃——既に四半世紀前のことである。

若い友人にすすめられて私も読みはじめたが、途中でついていけなくなった。村上春樹の小説を理解できる読者層には世代の分水嶺があるといわれている。私は旧世代に属する。

分水嶺のめやすはひとつにはビートルズの曲。「この曲を聴くと深い森のなかで迷っているような気がするの」とヒロインの直子が言うが、私はそんな気にならない。ビートルズは一九六〇年代に活動したロックバンド・グループで、日本でも公演した。当時の若者がビートルズの世代だが、ロックが好きでなければビートルズの世代とはいえないし、村上春樹の文学も理解できない。

最近になって、トラン・アン・ユン監督の映画を観た。監督は一九六二年にベトナムで生まれ、十二歳のとき、戦争を逃れて、両親とともにフランスに移住した。現在はパリに住んでいる。

こういう経歴の人物が映画化しようという情熱を燃やすところをみると、『ノルウェイの森』には国際文学の普遍性がある。旧世代とはいえ、日本人の私が理解できないのはおかしい。そう思っ
て、まず映画を鑑賞し、続いて原作を一気に読んだ。こんどはかなり理解できたと思う。

ノルウェイの森

映画文学人生論



うかつなことに以前には気がつかなかったが、この小説のテーマは愛と性の不一致らしい。お互いに愛し合っているのに性（セックス）の行為がまともにできない若い男女の悲劇である。

キズキは直子を愛していたが、直子の心はキズキを受け入れても、体は受け入れることができない。キズキは絶望し、自殺してしまった。

キズキと直子の友人だったワタナベはある日偶然に直子と出会ってから、時々東京の街と一緒に散歩するようになった。直子の二十歳の誕生日、二人は性行為に成功した。直子にとっては生涯に一度だけの経験である。それ以来、直子はワタナベに逢おうとせず、姿を消してしまう。

笑い話ではない。こんな若者が増えてくれば人類は絶滅する。世界の人口は既に七十億を超え、二〇五〇年には百億に達するといわれているが、この小説が世界中の読者に読まれているのは危機感を感じている人が多いからではなからうか。

ワタナベは大学で知り合った緑に惹かれるが、性行為はしない。やはり直子のことになる。京都の施設に入所していることがわかったので、直子を見舞い、レイコと出逢う。直子は心が乱れたときはレイコに抱かれ、慰めてもらうという。最後に直子は死に、ワタナベはレイコと性行為をする。このやさしさは旧世代に理解できるか？

シューシューと鳴くや北欧甲虫